

兵庫県環境審議会廃棄物部会 議事録

日 時 令和5年12月25日(月) 10:00~12:00

場 所 兵庫県民会館 12階1202号室及びWEB

議 題 (1) 議題
・兵庫県廃棄物処理計画の改定について
・その他

出席者	部会長	新澤 秀則	特別委員	中野 朋子
	委員	浅利 美鈴(WEB)	特別委員	東浦 知哉
	委員	幸田 徹		
	委員	椿原 健右		
	委員	住本 陽子		
	委員	橋本 征二(WEB)		
	委員	藤原 拓(WEB)		
	委員	藤原 健史		
	委員	向山 遥温		

欠席者	委員	中野 加都子	特別委員	原 孝
	委員	花嶋 温子		
	委員	政井 小夜子		

事務局	環境部長	菅 範昭
	環境部次長	上西 琴子
	環境整備課長	高原 伸兒
	環境整備課副課長兼資源循環班長	吉田 光方子
	環境整備課廃棄物規制班長	松林 雅之
	環境整備課資源循環班主査	大角 宗久
	環境整備課資源循環班主査	隈部 康晴
	環境整備課資源循環班職員	松林 将大

傍 聴 者

議題（１）兵庫県廃棄物処理計画の改定について

○ 事務局から資料１～４について説明

以下、委員からの主なご意見

（藤原健史委員）

パブリックコメントの３番目の事項で、各主体が取り組みを進めていく上での資金に関して、回答はその他としており、本文には、記載しないという方針にしているという理由と、説明の後半のところで最適となるマッチングに努めますと記載されているが、マッチングの意味が理解できない。課長の説明を聞いてようやく理解できた。この書き方をもう少し丁寧に記載いただきたいのと、それぞれの国県、市、民間のレベルでいろんな補助が出るという話とうまく組み合わせて、関係する団体の間で何か協働とか参画とかを考えていくとのご発言だったと思うが、そこのところもう少し詳しく記載したほうがいいのかと思う。

（事務局）

取り組みや支援について、もう少し詳細に記載するようにする。資金面に関する取り組みの部分については、ご指摘いただいた意見を踏まえ、追記等を検討させていただく。

（向山委員）

兵庫県資源循環推進計画の概要というところで「資源循環の見える化」と記載があるが、それについて詳細に聞きたいのと、県の方が「資源循環の見える化」についてどういうふうに考えているのかお伺いしたい。私の考えとしては、資源循環の見える化という点で、そのモデルや資料だけを作ってわかりやすくするっていうのもいいと思うが、それだけではなく、実際に各家庭にコンポストなどを配布し、生ゴミから野菜の肥料ができるそのサイクルを各家庭に実感してもらいたい。真庭市で実際に行われている例で、バイオ液肥を無料で配布し、家庭菜園で使用してもらうことで、実際に資源循環を自分で体感できる。そういう自分の目で見て実感できるような「資源循環の見える化」を実施してもらいたい。各家庭が難しくても小学校とか中学校に協力いただき、中学生以下の子供たちに対してそういう環境体験学習を行うことで、アンバサダーとして高校生、大学生が広報で入ることができれば、もっと多くの世代に伝えることができるのではないかなと思います。

（事務局）

向山委員のご意見は、見える化という点で非常に重要であると考えている。プラスチックの件でいうと、ペットボトルからペットボトルにリサイクルされているのが２割程度ということが事実であるが、その事実が県民へあまり認知されていないと思われる。ごみ捨ての際に、ペットボトルを洗ってラベルを外し分別して捨てている人であれば、ペットボトルがペットボトルにリサイクルされていると認識されると考えられる。県民へ認知を広めるためには、廃棄されるごみがどういう流れで資源化されてるのかが理解

できる仕組みを作る必要があると考えている。その部分については、市町と協力して取り組むことになると考えている。また、生ごみのコンポスト化等については、ごみの減量化や環境教育の面で非常に重要であると考えている。家庭でもそういう取り組みを行うことで、子供たちの勉強にもなるので、資源循環という言葉の意味を、もっとわかりやすく伝えられたらなというふうに思っている。資料の修正については、計画内に環境学習、教育の部分についての話は記載されているので、必要ないと考えている。

(東浦委員)

計画については、取りまとめられているので、修正はいらないと考えているが、次回以降に向けて、気になったことが2点ある。経産省の資源循環に関するプレゼンテーションを聞く機会があり、その際にEUの例が出ていた。EUの資源循環経済の政策は、例えば電子機器の再利用であるとか、再生可能性を上げる。自動車の再生プランの利用度を上げるといった、循環経済に関して規制に基づくドライブインセンティブはその産業に対する姿勢に対して出ているということが1つ言われていた。日本でも、8月に岸田首相が富山県の射水市のリサイクルセンターでリサイクル家電処理前ライン及び縦型破碎機ラインを視察され、10月には各分野のエキスパートを集めて対和をされて、その後経産省の産業技術環境局と環境省の環境再生資源循環局が一緒になって産環学の力を糾合するような協議会を発足した。循環経済に対して、その推進体制に厚みをもたらしており、主に産業部門と環境部門の結合の中でそのような作り込みをしている。そういう意味でいうとこの資料の中にも食品ロスに関して農水部門等と協力するということができているが、もう少し製造業や流通業などの産業部門と環境部門を結びつけるようにすることで、推進体制に厚みを持たせられないかという印象がある。国の方はむしろそういう動きをとっているというふうに感じている。

2点目は、ロシアがウクライナ侵攻をし、台湾海峡を挟んで、米中の対立が厳しくなっている。地政学的リスクが生じると、経済と交易でデカップリングのようなことが起こっている。その反動として、鉱物などの自然資源を輸入するということが制約が生じてきている。これを補うための、資源貿易の途絶を補うようなは域内の国内の資源循環を加速しようというニーズは間違いなく強まっているので、資源確保、要するに化石資源や代替資源、或いは鉱物資源の確保が重要であるということをもって、循環経済計画の強度を上げるような視点がないのかなと思う。地球を美しくすることはもちろん大事なことであるが、資源確保面で我が国が置かれてる状況という観点を政策計画の強度を上げるために用いてはどうかという印象があった。

(事務局)

資源循環計画については、そういったところも見据えてはいるが、身近なところからの取り組みということで、プラスチックなどを挙げさせてもらっている。今回のこの計画ではそういった少し足元からボトムアップであるというような形でまとめさせていただいている。別途、この上位計画である兵庫県環境基本計画を今、環境審議会の方でのご審議賜っておりますので、むしろ環境審議会の方でそういった内容の議論が若干必要であると考えている。こちらで議論ししないというわけではないが、そちらの審議会で

議論するのが良いと考えている。

(新澤部会長)

先ほど藤原健史委員から発言のあった、意見について、どのようにわかりやすく反映させるべきと事務局は考えているか。

(藤原健史委員)

例えば国に予算申請をしていくとか、いろんなニーズがあると思うが、それをうまく組み合わせ、それをグループ化して、そこで補助金を待つのではなく、国へ何か提案し補助金を取りに行くってような計画にしてはというふうに思っている。

(事務局)

国に提案していくというところまでは考えていないが、各主体との連携はいくつあるかで、その辺の記載についてはもう少し強調したりする必要があるかと考えている。また、市町への補助という部分では、60 ページに、収集に対する経費等の補助制度を県独自にしてるって部分はあるが、各取り組みされてる団体とかについては記載が無いので、その部分については検討をしていくべきと考えている。

(新澤部会長)

他に意見がないようですので、事務局は本日の委員の意見を踏まえて、資源循環推進計画案を修正をお願いしたい。この修正については、部会長である私が責任を持って修正を確認した上で、了解とさせていただきたいと思いますがよろしいでしょうか。

(各委員)

異議無し

(新澤部会長)

なお兵庫県環境審議会運営に関する規程第9条第1項の規定により、具体の決議は会長の同意をえて審議会の決議とすることができると定められている。中瀬会長は本日欠席のため、事務局において中瀬会長に確認いただき、了解を得れば、この資源循環推進計画案で方針答申とさせていただく。

また、事務局より今後資源循環部会の開催予定等の説明をお願いしたい。

(事務局)

これで答申の方ういいただければ、今年度についてちょっと予定はないが、従来のやり方のおり、毎年この計画がどのように進んでいるのかということ、点検報告させていただくという場を、年に1回程度設けたいと考えている。この計画作るにあたり、今年度の最新の情報を用いて計画を作っているため、新たな時点修正は、また来年度ぐらいになるかなというふうに考えている。

(新澤部会長)

新たに委員になられた方もおられるため、新しい委員からなにか御意見等があれば、ご発言いただきたい。

(浅利委員)

プラ新法関係について、市町村の努力ももちろん重要であるが、県がある程度リーダーシップとか調整役となっていていただき、インフラ整備含めてやっていただくのに、非常に重要なテーマじゃないかなというふうに思っている。各自治体、他の都道府県もいろいろ模索されてると思うが、兵庫県が是非リーダーシップをとっていただきたいなというのが一点。また、そういう意味で大阪ブルーオーシャンビジョンや、瀬戸内の説明会等でも、兵庫県はいろいろ力入れて取り組まれていると思うが、海洋流出するもの自体を減らすことも大事であるが、ぜひクリーンアップのネットワーキングや、関西広域連合とも力入れているので、県のみならず、周辺とも連携して取り組みいただけたらありがたいなというふうに思っている。

(向山委員)

今後も若い世代の力をぜひ使って欲しいってところをお話させていただきたい。

高校生エシカル推進会という団体を立ち上げ、兵庫県内の高校生を中心に 50 名ほどで活動を行った。気候変動や今ある環境問題について、いかに楽しく面白く伝えられるかを考え、私自身も環境ラップとか、団体の仲間は漫才や歌、コスプレなどを通して伝えてきた。そういう活動をしていく中で、他の環境団体や同世代の団体と関わる機会があり、同世代として尊敬できる仲間や、環境問題を解決したいっていうふうに思って活動している大学生や仲間はすごい多いので、ぜひその仲間同士をつなげる役をさせていただきたいと考えている。私自身も啓発していきたいと考えているし、若い世代が発表できる機会とか、啓発できる機会をいただけたらすごく嬉しい。

(中野委員)

食品ロスそしてプラスチックについて循環させなきゃいけないことは、実際に進んでいるかどうかは別として、かなり世間一般に浸透はしてきていると感じられる。それに対してサステナブルファッションが、まだまだ世間への認知が低いと思う。というのはどこでどう無駄が出てくるのかがあまり見えてない。古着の回収はされているが、回収された古着がどうなるのかがあまり見えていないのではないかな。古着の製造段階よりも流通段階でのロスの方がかなり大きい。そういうところの啓発をしっかりしていくことは重要である。また、服は今通販で買ったりして、場合によっては海外から買ってるケースも考えられる。県レベルで済む話ではないので国との連携も重要になってくる。神戸はこういうファッション関係アパレル関係が非常に多いと思うので、サステナブルファッションを行う上で、中小企業への対応が課題となってくると考えられる。

(橋本委員)

1 点目は中期的な話としては、ごみを減少していくことや脱炭素ということに向けて、

或いは循環経済というところに向けて、先ほど紹介のあった広域化が必要になってくると思う。その時の県の役割は重要になってくると思うし、計画から実際に施設が建設されるまで長い期間が必要になってくるのでぜひ県が主導されながら広域化を進めていただきたいなというふうに思っている。

2点目は、プラスチックの話で、計画の中に循環型ケミカルリサイクルという言葉が何ヶ所か出てきており、中長期的にカーボンニュートラルというところに向けて非常に重要な技術になってくると思うが、県としてこの計画の中で、循環型ケミカルリサイクルということについて、優先する施策として何か考えていることはあるのか。

3点目は、一般廃棄物の再生利用率がなかなか上がらなくて、資料の中ではコロナウイルスの集団回収の減少ということであるが、紙類(新聞紙等)が減ってきてなかなか上がらないので、循環利用率も結果的に上がらないということもあり、また一方で役所が関与するような、リサイクル以外のリサイクルもどんどん進んでいっているということもあるので、役所が管轄する以外のところで行われているリサイクルなんかも含めて、実態として把握することが今後重要になってくるかと思うので、今後検討していただきたい。

(事務局)

県の考えについて、新しく始まったプラスチック新法の中で、市町の容器包装リサイクルプラスチックとあわせて製品プラスチックも集めるということが今後どんどん増えてきた場合に、それを従来型のすべてリサイクルに回せば、残渣物が発生する。それを集めるコストや量のある程度集めた上で、ケミカルリサイクルをしていき、県としては市町にアドバイス等1つできたらと考えている。また、仕組みやフローなどは県民に理解いただく必要があるので、仕組みとともにその数字的なバックボーンなどの裏付け等も県の方でも用意し、取り組みを進めていけたらと考えている。

(椿原委員)

特にお願いしたいのがプラスチックごみと、海底ごみや漂着ごみについてである。

私は平成21年に船に乗って、漁をしつつ海底ごみを回収した経験がある。けっこうなごみとともに魚が取れたというなという印象がある。特にプラスチック系のごみが多かった。また海岸清掃にも、その頃何度か参加し、ごみを集めるが海岸では燃やせない。市が引き取るが、塩分が付着すると焼却炉が傷むなどの話を聞いたりする。

今回の推進計画ではプラスチックごみについて、方針なり計画なり、書いていただいているので、まずごみを出さないということがありがたい。計画は達成して欲しいし、前倒しして欲しいというふうに考えている。また、なかなか難しいと思うが、海底に沈んでしまっているごみについても回収できないかなと考えている。

(住本委員)

椿原委員の意見に関連し、須磨海岸の清掃活動にはよく参加している。若い方のFRSネットという、環境の団体があり、私もその会員になっている。海の清掃、海岸の清掃活動で一番よく活動されてるのが海桜という団体がある。海岸の大きなごみだけで

なく、小さいマイクロプラスチックも集めるということを一生涯懸命行っている。100 人を超えるような方が親子連れであったり、近隣の企業さんであったりとかが参加し、とても関心が高いなというふうに思っている。一方で、年に何回かそういった清掃活動するが、毎回そのプラスチックごみってというのが大量に漂着するというような状況である。海外から流れ着いているということも考えられるが、そういった現状を見て、意識のある方と意識がない方との関心の差が大きいなというふうに毎回実感している。

やはり学校教育、向山さんがおっしゃったように、若い方へのそういった啓発が大事だと思う。若い方などはまだ使い捨てでもいいというような意識があると思うので、そのところはやっぱり改善していかなければならない。また、企業が消費者に向けた注意喚起や、そういったところをやっていくことが大事であると思う。先ほどお話もあったように東須磨漁港では、底引き網で、ごみを回収することを一生懸命取り組んでいる現状もあるので、そういった意識の高い方とあと関心が低い方の差を埋めていくための啓発活動というのを頑張って取り組んでいただきたい。

(藤原拓委員)

大阪ブルーオーシャンビジョンの着実な達成に向け、兵庫県としてどういうふうに進めていくかという中で、やはりマイクロプラスチックを含むプラスチックごみの陸域からの排出インベントリーをきちんと作成、評価をしていく中で、どこからどれだけ出ているのかというのを踏まえた形で着実な対応、対策を打っていくということが重要なのではないかなというふうに思う。現在環境省も、環境研究総合推進費はじめとして様々なこのインベントリー作成に向けた取り組みを進めている。その辺りとも連動しながら、兵庫県としてのインベントリー作成というのを進めていただくと良いのではないかなと思う。

またその中で非常に対応、対応というかですね定量的な評価は難しい部分として、投げ捨てごみをどういうふうに取り扱うのかまた市民による回収の効果をどういうふうに定量的に評価をするようにすればいいのかっていう辺りは研究面でも非常に難しい課題として、試行錯誤して取り組んでいるところでもある。そういった部分についても、環境省と協議されながら検討進めていかれたらどうかと思う。

(新澤部会長)

一通りご発言いただいたと思うので、これをもちまして、本日の議事を終了いたします。

以上